

コア方式とは——『ジーニアス和英辞典 第2版』の特長

南出康世



本題に入る前に簡単に従来の和英辞典を振り返ってみよう。

筆者はある出版社の英語ライティングの教科書編集に関わっている。当然のことながら、和文英訳、自由英作文といった練習問題が議論の対象になり、編集に携わっている高校の教員の意見が重きをなす。さまざまな意見が出るが、その根底にあるのは「できるだけ和英辞典を引かせよう」というのでなく「できるだけヒントを与えて、できるだけ和英辞典を引かなくて済むようにしよう」という考えである。もちろんヒントを出すことによって解答のバリエーションを少なくして採点の便を図るというのも理由の1つであるが、もっと大きな理由は和英辞典に対する不信感である。最近ではネイティブスピーカーによるチェック態勢が整ってきて、かつてのような不自然な英語の例は激減した。しかし、ネイティブスピーカーに英文をチェックしてもらえば、すべてが解決するものではない。一例を示そう。ある和英辞典には「彼は自分の不注意から仕事を失った」の例として、His carelessness lost him his job. があげられている。なんとなく「しゃれた」言い回しで、確かに英文自体は問題がないのでネイティブスピーカーはこれをパスさせるだろう。しかしこの英文は、「彼は不注意だった」ということがすでに話題になっていて、「その不注意のゆえに仕事を失った」という文脈で初めて使える英文である。しかし和英辞典の用例としては、そのような前提を伴わない、もっとありふれた、He lost his job because he was careless in his work. のような

例がふさわしい。

もう1つよく聞く和英辞典に対する不満は、用例の羅列が多く、各語の交換可能性（詳しくは後述）が分からないということである。

『ジーニアス和英辞典』（1998）[以下GJE 1]は、和英辞典の中に英和辞典の要素を組み込んだ「ハイブリッド方式」を採った。『ジーニアス英和』の文型・選択制限・連語関係などの情報を盛り込んで語の用法がその場でわかるようにし、従来のように英和辞典を引き直さなくてすむように考えたわけである。

しかし、英和辞典は本来的に受信型であり、和英辞典は発信型である。それゆえ英和辞典をベースにした和英辞典は、上述のような長所の一方で、発信には特に必要としない受信のための情報を抱え込む可能性もある。たとえば、『ジーニアス和英辞典』（初版）の「勧める」の項を見てみよう。そこにはハイブリッド方式の「英語中見出し」として recommend があり、

recommend*◎〈事〉を奨励する；[SV doing/that 節；(米非標準) SV for O to do/ (英) SVO to do]…することを勧めるとある。用いるべき文型がここでただちにわかるようになっている。

それはよいが、(非標準)の文型は、和英辞典としては必要性が低い。確かに私たちは recommend for John to use this application といった表現を聞いたり読んだりする可能性は高い。そしてそれが非標準語法であることを教えてくれるのはありがたいことである。しかし和英辞典では、

標準的な文型が提示されていればいいだろう。

以上のような点をふまえて、GJE2の編集に取り組んでいる。主要な原稿は英語のネイティブスピーカーと共同で書くことになっている。そのプロセスの一部を紹介しよう。

■GW2の特長(1): ネイティブスピーカーによる共起制限のチェック

シノニムの識別のための方法として同一文内における、共起制限を下記の5段階基準で調べている。(辞典の紙面では、無印 (typical), ^ (less typical), × (non-typical) の三段階表示とする。)

- + = OK (typical)
 - * = very slightly unusual (less typical)
 - ** = notably unusual
 - *** = very unusual
 - **** = deviant
- } (non-typical)

■GW2の特長(2): コア方式

コア方式には2つの意味がある。1つは、日本語から見たコアで、日本語の核をなす語(見出し語)を選定することである(この作業は編集部が行っている)。もう1つの意味は、当該日本語に相当する英語シノニムの中から英語のコアをなすと思われる語を選定して「コア中見出し」とすることである(この作業は執筆者が行う)。この場合、第一の基準は頻度の高い語ということになるが、場合によっては頻度はそれほど高くなくても、日本人英語学習者、特に大学受験生によく知られている語を含めることもある(受験英語ではおなじみであるが、実際にはあまり使われないといった指示が時には必要であり、またユーザーにとって有益である)。例えば日本語のコアとして「明らかな」が選定されたとしよう。これに相当する英語のシノニムはかなりある。

clear, evident, obvious, plain, apparent, unmistakable, manifest, patent, palpable, conspicuous, clear-cut, express, in-

controvertible

この中で、コア中見出しとして選べるのは常識的に、clear, evident, obvious, plain, apparent, unmistakableである。これらの語の共通部分と相違を日本語で説明するのは難しい。いろいろ考えても「明らかな」という訳語に全てが凝縮されている。そこで、統語的な相違と共通点を表す形で記述を試みた。

「明らかな」 clear, evident, obvious, plain, apparent, unmistakable

(1) it is ... that ... 構文: 彼が仮病を使ったのは明らかだ It is clear [obvious / evident / apparent / definite / *unmistakable] that he pretended to be ill. この構文では、unmistakable以外の語が普通。

(2) 文副詞: unmistakably以外の語が普通。Clearly [Obviously / Evidently / Apparently / Definitely], he pretended to be ill. ただし、apparently, evidentlyでは「明らかに」の意よりも「一見したところ」の意になるのが普通。

(3) from-句・to-句との共起: clear, obvious, evident, apparent, plainは「(視界を妨げるものがなく) 明らか」が原義なので、視界の起点を示すfrom-句、視点の対象を示すto-句と共起しやすい。一方definiteは「(境界をはっきりして) 明らか」 unmistakableは「(誤りを犯すことがないほど) 明らか」の意なので、起点を示すfrom-句とはしっくりこない: 彼の失敗は彼の態度からも明らかだ His failure is plain [obvious / clear / evident / apparent / *definite / *unmistakable] from his demeanor. / その計画は修正が必要なのは私に明らかだ It seems obvious [clear / evident / apparent / *definite / *unmistakable / plain] to me that the plan need some revisions.

(4) 慣用原則 (Idiom Principle) で形容詞がほぼ固定している場合: 私は立場を明らかにしておきたい I want to make myself clear [plain /

*obvious / *evident / *apparent / *definite / *unmistakable] / 自分が正しいことを明らかにして下さい Please make (it) clear [plain / *obvious *evident / *apparent / *definite / *unmistakable] that you are right.

(5) 「明らかさ」の度合い: It is clear—in fact, it is obvious. / *It is obvious—in fact, it is clear: It is obvious—in fact, it is unmistakable. / *It is unmistakable—in fact, it is obvious.

(6) 文体上の相違: clear, definite は文体的に中立的で、日常的な文脈では最も頻度が高い。

(7) 限定用法では、これらの形容詞の差異ははっきり説明がつかない: 明らかなら a(an) clear [obvious / evident / apparent / definite / unmistakable] lie / 明らかなら誤り a(an) clear [obvious / evident / apparent / definite / unmistakable] fault / 彼がそれを使ったという明らかなら証拠を発見した I discovered clear [obvious / apparent / definite / unmistakable] evidence that he had used it.

次に、「財産」「資産」を意味する英語のシノニムを取り上げてみよう。

「財産」 fortune, wealth, property, estate, asset(s)

下記例文に対するネイティブスピーカーの反応は次の通りである。

(1) She received ++a property [++a fortune / ++wealth / +an estate / +an asset] by inheritance.

ここで問題になっている「財産」は(1)既存の財産であり、(2)財産の内容と規模は問われていない。要するに最も一般的な意味での「財産」である。この意味では各シノニムは交換可能である。シノニムの共通部分である。

次にその差異の部分を検討してみよう。

(2) Owing to his family's ++property [+fortune / ++wealth / ?**estate / ****asset], he was able to climb high in society.

この文脈では「大きな財産」が含意される。estate が不可なのは、このような含みはないからである。asset については後述する。

(3) He is a man of ++property [****fortune / ++wealth / ****estate / ****asset].

この文脈でも estate, asset(s) は不可である。

(4) estate が可能な例をあげてみよう。

彼の父の財産は会社の株と大阪の持ち家である Her father's ++property [++estate / ***fortune / **wealth / ****asset] included shares in the company and a house in Osaka.

(5) She apportioned the ++property [++estate / **fortune / **wealth / ****asset] to her two sons.

(1)と同じく、その財産の規模を問題にせず「(既存の) 財産」をいう場合に使うことができる。(4)(5)をみて分かることは具体的な既存の財産をいう場合は fortune, wealth は好まれないということである。次例についても同じ事が言える。

(6) He relinquished his claim to[on] the ++property [++estate / ?**fortune / ?*wealth / ****asset]

英語には 'Fortune is money.' という概念メタファーがあるので、money と連語可能な動詞、形容詞は fortune とも共起する。このようなコロケーションでは他のシノニムが用いられる可能性は少ない。

(7) He made a ++fortune [****property / ****wealth / ****estate / ****asset] in the oil business. (cf. make money)

(8) He ate up [++fortune / ****property / *wealth / *estate / ****asset] by gambling.

(9) My grandfather left me a large fortune [****property / **wealth / ?+estate / ****asset]. (cf. a large sum of money)

*

以下省略するが、辞書記述の背後にあるプロセスの一部を紹介した。

(みなみで こうせい・大阪女子大学教授)